文部科学省認可通信教育

ON AIR

NO. 113

放送大学通信 オン・エア
発行月 2014年2月
発　行 放送大学
〒261-8586 千葉市美浜区若葉2-11
043-276-5111(総合受付)

CONTENTS

博士後期課程設置について……1
特別座談会:根岸 英一博士をお招きして……3
被災地リポート……7
特集:地域貢献プロジェクト……8
研究室だより……12
学習センターだより……13
2014年度開設改訂科目紹介……14
退任のごあいさつ……18
インフォメーション……20

目指そう、“学び”の高みを

――博士後期課程設置の意義を語る

放送大学副学長 吉田 光男

放送大学大学院では、本年4月に博士後期課程を設置、第1次・2次の選考を経て10月に学生受け入れを開始します。博士課程設置は放送大学にとって、そして学生の皆さんにとってどんな意義があるのか。他大学にはない教育システムとは何か――吉田副学長から“放送大学ならでは”をキーワードに熱きメッセージを寄せていただきました。

大学として完成した姿に

博士課程設置の構想は10年ほど前からあり、ここ3年の間の具体的な進展を経て本年4月設置の運びとなりました。副学長としてこの好機に立ち会えたことは非常な喜びです。

それにしても、なぜこれほどの長い時間を要したのでしょう。そもそも文科省には、放送大学に博士課程を、という発想がなく、ゼロからスタートしなければなりませんでした。幸いにも、生涯学習への国民的ニーズの高まりとともに、文科省の担当部局（生涯学習政策局）のバックアップを得、広く社会人を対象とする放送大学こそが生涯学習を体系立てて提供できる機関であり、博士課程設置もその一環であるとの理解を得られ、ようやく設置認可となったのです。

内部にも事情がありました。博士課程では、何よりも学生への綿密な指導体制が求められます。そのため、教員の間に時期尚早との声がありました。しかし、メディアの急激で多様な進歩を背景に、そして岡部学長の積極的なICT活用の号令のもと、それは可能であると賛同が得られ、設置に至ったのです。

2001年の大学院修士課程設置からかくも長い時間を要しましたが、社会人教育の中枢機関として歩んで来た放送大学は、ここに高等教育の最高段階を有する、大学として完成した姿になったことになります。他の通信制大学のモデルともなるでしょう。とても意義深いことと考えています。

さらに“学び”の高みを

博士課程設置は、さまざまな状況で働いている人にも社会人研究者となり、地域や職場等におけるリーダーとなる道が開かれたことを意味します。実は、大学院修士課程を設置して学生に変化が現れました。4年制の上に新たな目標ができ、学生の“学

び”がより深くなったのです。博士課程設置は、さらにその上に目指すべき“学び”の高みができたことになります。

研究を深めたいと思っても、いろいろな制約――距離や時間等の制約から博士課程への進学を諦めた人は多いと思います。一方で、その制約を何とか克服して放送大学の修士から他大学の博士課程に進まれる方も毎年20～30名ほどおられます。その背中を押しながら、ああ放送大学にも博士課程があれば、といつも思ったものです。これからは放送大学で、放送大学の“いつでも、どこでも、だれでも”によって、その“学び”の高みを目指せるのです。

ここで先に、“放送大学ならでは”の“学び”の弱点を申し上げておきましょう。一般の大学は、教員以外にも、縦方向に助手やポスドク（博士研究員）といった先輩がいて指導してくれます。一方、放送大学では、横方向の、同輩の学び合いだけになりがちです。この閉塞情況に風穴を開けるのが博士課程設置だと私は考えています。“学び”の輪は、博士課程から修士、学士と広がっていき、放送大学全体のレベルアップに寄与するでしょう。このことは日本の生涯学習の底上げに、ひいては日本の目指す高度知的社会の実現にもつながるものです。

つまり、博士課程設置は学生の皆さんにとっても、放送大学にとっても、日本にとっても有意義なことなのです。

“ヨコに広げつつ深く”――“放送大学ならでは”の受け入れ体制

“社会人の大学”――これは放送大学の本質です。ですから、博士課程でも“社会人”を受け入れることを基本とします。これは“放送大学ならでは”の大きな特徴です。地域や職場等で様々な課題に直面し、その解決を学問的アプローチで図ろうとする人たち。あるいは働く中で課題を見つけようとするその発想を学問的に汲み上げ体系化できる人たち…。第1次・2次の選考を行いますが、ペーパーテスト偏重となることなく、その方の経験知・実践知に裏打ちされた社会経験を重視したいと考えています。

この“社会人”は、主婦や引退された方々も含みます。例えば地域の中で子育てを終え、子育ての持つ意味、そこを基点に福祉について考え地域の新たなあり方を模索されようとする人も、研究者としての出発点に充分立つことができるのです。

こういう方々は、“学び”への意欲を充分お持ちです。反面、いろいろな制約から学び続けることが難しい状況を抱えています。でも、だからこその放送大学です。“いつでも、どこでも、だれでも”によって博士課程という場を提供し、学生にはその場で研究者の道を存分に歩んでほしい――その思いから、指導体制も“放送大学ならでは”の工夫を凝らします。

他大学では、一人の学生に一人の指導教員がつくのが一般的ですが、放送大学では３名の指導教員による集団指導体制をとります。うち１名は主研究指導教員。学生が研究テーマとする専門領域にピッタリ寄り添い、研究を深く掘り下げ最後まで責任を持って指導します。残り２名は副研究指導教員。学生の研究テーマの近接領域…例えば「生活健康科学プログラム」で地域福祉がテーマであれば看護学とか文化人類学、「人文学プログラム」で歴史がテーマなら文学とか経済学とか、そういう近接領域からもっと離れた領域まで広げて学ぶ。つまり、“ヨコに広げつつ深く学ぶ”。この近接領域は、学生の意向を尊重しながらも、最終的には主研究指導教員が主導します。主研究指導教員は、専門領域周辺までも俯瞰する広い視野を持っているからです。この“放送大学ならでは”の指導システムによって、従来にない、深くて広い教養知を有した新しいタイプの研究者が誕生することを期待します。

“放送大学ならでは”の豊富な教育資源を活用

具体的な教育方法についてお話しましょう。

まず、多様なメディアを駆使して時間・距離の壁を打破します。双方向性のあるWeb会議システムやメールを含む各種メディアを使って、距離や時間の壁を乗り超えた指導をします。掲示板を使えば学生同士の討議も可能です。

直接指導が受けられる集中対面指導も行います。年に数回の個人指導や集団指導となりますが、学生一人ひとりの事情を勘案して日程を定め、場所も本部キャンパスを基本としますが、地元の学習セン

ターで行うなど柔軟に対応してまいります。

そして、最も強調したいメディアが膨大な放送授業のアーカイブスです。現在開講している科目（約340科目）と過去の開講科目（約1,800科目）のすべての教材にアクセスできます。他大学では、過去の授業を視聴するなどできません。“放送大学ならでは”の教育資源です。研究テーマに応じて、学問の蓄積を研究インフラとして存分に使いこなし、新たな研究フィールドを拓いてほしいと思います。

また、もう一つの放送大学の財産である学習センターについて。学習センターにはWeb会議システムの環境が整っており、いつでも利用できます。また、放送教材の提供を受けたり、文献検索によって資料を集めたりといったことも可能です。さらに、学習センター長をはじめとした人的ネットワークが、学生の“学び”に陰に陽になって寄り添います。学修上の相談に応えたり、研究テーマについて学問上のアドバイスをしてくださったりします。どうぞ、学習センターをご自分のキャンパスとして存分にご活用ください。

以上の空間的・人的機能を駆使した教育方法に加え、もう一つ、特徴として挙げられるのが、履修カリキュラムの“見える化”です。専門領域と他領域を組み合わせた綿密なカリキュラムを作成しますが、それをMAP化して「今、自分はどの辺りにいるのか」、研究の到達度を俯瞰できるようにします。その都度“学び”の道標を確認して、意欲の維持を図ります。教員も同じくMAPを俯瞰しながら、経験主義に陥ることなく客観的に指導を振り返り、必要があれば軌道修正するなどして柔軟かつ多様に学生を指導します。

最後に──。博士課程への進学をお考えの学生の皆さんへ。放送大学は常に皆さんとともにあります。皆さんと指導教員は一心同体です。困難もありますが、博士学位取得というゴールを目指して一緒に前へ、“学び”の高みへと歩を進めましょう。ご奮起を期待します。

特別座談会　根岸英一博士（2010年ノーベル化学賞受賞）をお招きして

ブラウン先生の教え
──それは「失敗」に学ぶ姿勢

根岸 英一　パデュー大学特別教授
岡部 洋一　学長（電子工学）
岡野 達雄　東京文京学習センター所長（真空工学・表面物理学）

去る25年12月1日、東京文京学習センターにて、2010年ノーベル化学賞を受賞された根岸英一パデュー大学特別教授による「特別講義番組」の公開収録が行われました。本号では、その後に行われた、根岸教授、岡部学長、岡野同学習センター所長による座談会の模様をお伝えします。※本文中は敬称略とさせていただきました。

（左から）岡野 達雄所長、岡部 洋一学長、根岸 英一教授

正解だった指導者の選択

岡野　貴重なご講義をありがとうございました。そのすぐ後に、このような座談会をお願いして申し訳ありません。早速ですが、ご講義を拝聴してとても興味深く思ったのは先生の「師匠を選ぶ話」でした。先生は帝人在職中にフルブライト奨学生としてペンシルバニア大学に留学。その後、パデュー大学のハーバート・C・ブラウン先生に師事されています。

根岸　私は、ペンシルバニア大学に留学して2年後

の1962年にブラウン先生の講演を聴きました。それは先生の1979年ノーベル化学賞受賞に結びついた「ハイドロボレーション」（有機ホウ素化合物を利用した新しい有機合成法）についての講演でしたが、これはすごい、と強く惹かれました。その後、一時日本に戻りましたが、ペンシルバニア大学の化学科主任であったC・プライス教授が日本に来られた折に「もう一度アメリカで学びたい。だから推薦状を」とお願いしました。するとブラウン先生を含む3人の先生からオファーをいただき、私はブラウン先生を迷わず選びました。この選択は正解だったと今でも思っています。私とともにノーベル化学賞を受賞された鈴木章先生も北海道大学助教授時代にブラウン先生と決めてポスドク（博士研究員）として行かれております。

根岸 英一教授

岡野　留学を決意された理由は何でしょう？

根岸　帝人での経験が発端です。大学3年時に「帝人が奨学金を出す」と聞いて応募したら、幸いパスし潤沢な奨学金を得ることができました。帝人に就職した理由も「入社すると返済しなくて済む」というものでした。ところが帝人の研究所に配属されるや、「高分子有機反応をやってくれ」と。随分と広いテーマで、なおかつ私には十分な知識がありません。一体何をやればよいか見当がつかず、「指導してくださる方は？」と尋ねました。すると「いや、誰もいません。君がやるんです」と。ビックリ仰天、すぐ大学院に戻ろうと思いました。でも、大学は奨学金で済ませましたが、大学院となると相当高額な授業料がかかります。両親に経済的余裕はなく、ではどうしよう、とあれこれ方策を練っているところへフルブライト奨学生の話が出たのです。これだ！ これでアメリカに行ってやり直そうと考えました。

岡部　そもそも先生が大学で応用化学を専攻された理由は…。当時、日本はケミストリー全盛時代です。

根岸　確かに全盛時代で、石油化学が花形産業でした。でも、一直線に応用化学を志した訳ではありません。中学・高校では電気いじりが趣味で、ラジオだの無線だのを自分で作っておりました。当時は、神田辺りに電気街があり、トーツーコー（東京通信工業、ソニーの前身）とかにもよく足を運びました。ですから、専攻を決める際には私も一番人気の電気工学を、と決めていたのです。ところが、ある大手電機メーカーに就職した先輩から「あそこはケチだぞー」と電車で会う度に聞かされるうちに、電気への熱が冷めてしまいました。そうこうしているうちに、ナイロンだ、テトロンだと化学繊維業界にも注目が集まるようになり、面白そうだなと応用化学の方へ舵を切ったのです。社会人になったら結婚という予定があったので、当業界の待遇の良さがむしろ大きなファクターだったかもしれません。

岡部　電気いじりがご趣味だったとは…もしかして私の先輩ですね（笑）。

“Time is your own”

岡野　私が大学の研究所にいた時に、企業から戻られた方は時間管理が上手でした。限られた時間内に成果を出される。ご講義の中に「レゴゲームの発想で」というお話がありましたが、そのアイデアを成果に結びつけるには丹念な作業と時間が必要です。それがないと、道半ばで…となります。

根岸　夢を追って研究に邁進したが気づけばそろそろ定年、という方が半分以上では…そんな気がします。では、どうすれば夢は実現できるのか。そのコツのようなものをブラウン先生に教えていただきました。先生に対して、外部の一部から“Slave Driver”（人使いの荒い人）という見方がありましたが、全く違います。“Time is your own”――時間はあなた自身のもの、が口癖で、アレやれ、コレやれなんて一言もおっしゃられない。では遊んでいていいのかというとそうは行きませんでしたが…（笑）。ホウ素化合物の実験は、結果が出るまで2、3時間かかります。私たちがSlave（奴隷）なら、その時間にキャンパス内のゴルフ場でプレイなんてできません。ある時、ゴルフから帰ってみると“See me please when convenient”と先生のメモがありました。「実験待ちの時間があったので」と言いましたら、

すかさず“Time is your own”です。ですから時間の使い方には確かに厳しかったのかも知れません。また、結果主義でもありました。これは逆説効果を狙ったのでしょう…先生がヨーロッパなどへ1カ月以上の長期旅行に出かける際に必ず言われる言葉がありました。“Don't work too hard”。続けて「私のいない時にいい仕事をされると、私のエゴが傷つくから」と念押しされます。すると、皆モーレツな勢いで働き始めます。先生が帰った時にいい成果を出しておけば認められる、論文に先生との連名が許される、そういうチャンスだと考えていたのです。研究室には20数人の研究者がいて、5人ほどのプロジェクトを組み研究していましたが、毎週月曜の朝9時には全員揃ってのミーティングと決まっておりました。ですから、土・日も出て働かざるを得ない（笑）。なかなか上手い先生だな、と。でも、一人ひとりのキャリアアップを親身にサポートしてくださったり、家族のことを心配して声をかけてくださったり、と優しいところのある先生でもありました。

岡野　指導のやり方も教わった訳ですね。

“Is it chemistry or you?”

根岸　ブラウン先生から学んだことで、いちばん重要だと今でも思っていることは、実験の「失敗」についてです。普通は、失敗するとすぐに別のプランに移りますが、そういうことを先生はなされない。

岡部 洋一学長

“Is it chemistry or you？”――ケミストリーで失敗したのならこれは仕様がない、それが真実。でも、本当は上手く行くべきものがyouの手違いによる失敗なら、と問いかけられるのです。そして、「失敗」から学ばないと1、2年するうちに何が何だかわからなくなってしまう、と。ですから失敗すると、その理由を見極めるために実験が3倍にも4倍にも増える訳です。先生は「実験しない私は気が楽だけど」と言っておられましたが…（笑）。

岡部　追試をさせられる訳ですね。人為的ミスを排除するまで。私は、chemistにはなれなかったな、きっと（笑）。私の専門の電子工学はデザインしたものをその通りに作り上げていくという発想が強い。分野が違うとこうも手法が違うんですね。

根岸　結果がプラスであれマイナスであれ、trueのプラスとtrueのマイナスを積み重ねていくことが知識の発展につながる、とよく言われておりました。つまり、先生はcontinent（大陸）の全貌を見据えておられた。発見という名の山ばかりではなく、谷があって渡れないといった「失敗」も含めて、先生は新たな地図を書かれようとされているのだと思いました。先生はそうやって新しい有機合成化学の分野を切り拓き、ボロン（ホウ素）に関しては最後の最後まで先生の右に出る者はいないと思っていました。

岡野 達雄所長

岡野　私の専門の表面物理学では、分かっている反応を理解しようというところ止まりで、有用なものを創造しようというレベルまではなかなか…。また、物理系は測定することを重視するあまり、測れたというところで満足してしまいがちです。

根岸　様々な領域の研究結果の総合力があって、科学者は前へ前へと進めます。ペンシルバニア大学在学中の1962年、ノーベル生理学賞を受賞したジェームズ・D・ワトソンやフランシス・クリックらによるDNAの二重螺旋構造の発見には度肝を抜かれ、生化学に転向しようとさえ思いました。自然科学の進歩に最も貢献した五指に入るのでは、と。ニュートン、メンデレーエフ、アインシュタイン…。でもあの発見もさまざまな研究の上に論理的に導かれたものです。

岡野　21世紀はサイエンスの時代と言われ、科学技術信仰が進んでいますが、混沌としており、ミクロスコピックな部分しか見えなくて、世紀の発見とかが段々難しくなっているように思います。

根岸　私は入口はどこでもいいと思います。そして個々の研究者が高いビジョンを持ち続けていけば、

自ずと答えが得られるだろうと。私が論理的な面で大きな影響を受けたのは福井謙一先生（1981年ノーベル化学賞）のフロンティア軌道理論です。実は先生の講義を一度拝聴したのですが、何が何だかさっぱり分からない。それでも頭のスミに置きながら研究していると、あっと関連が見えてくることがあります。1963年ノーベル化学賞を受賞されたドイツのチーグラー先生の講演を、その翌年、安田講堂で聴きましたが、ドイツ語を取っていたにも拘わらず皆目分からない。ただ、「katalysator（触媒）」という言葉だけが何十回も出てきたことは分かりました。それで触媒が大事なんだということが深く印象づけられ、それから触媒、触媒とやっていくうちに今のキャリアに結びついたのです。理解できるできないは別にして、関心を持ち続けることは大切です。

海外志向を捨てた（?）日本の学生

岡野　ノーベル賞を受賞されるような偉い研究者が一心不乱に取り組む姿は、後に続く若い人に人生を左右するほどの影響を与えます。根岸先生はたくさんの若い人を指導されています。

根岸　受賞の発表後にまっ先に日本に呼んでくれたのが帝人で、優秀な人間を2、3人ずつ送ってもくださいました。私の仕事に非常に高い関心を持ってくれており、自分が信じてやってきたことが若い人にも分かるのだな、と嬉しく思っています。

岡部　大学からダイレクトに、という方は？

根岸　東大、東工大、筑波大から来ましたが1年と持ちませんでした。

岡部　大学教育の問題でしょうか。

根岸　この例だけで全体を推し量ることはできませんが、帝人から来られた方々は帝人の中でセレクトされ目的意識が明確です。もしかして、本当に優秀な学生は海外に行きたがらないのかも知れません。

岡野　日本も研究支援予算がかなり拡充してきており、研究室は相応の結果を出さなければなりません。そのため戦力になる学生を縛る傾向があります。

根岸　私たちが海外に出た時は戦後まもなくで、教授の中には戦中派で充分な実績をお持ちでない方も。そういう先生が、海外へ行って学んで来い、と。

岡部　当時は、アメリカの知識や文化を早く輸入したいという意識が強い時代でしたから。

根岸　鈴木先生はアメリカから戻られ、北大を拠点に唯一ボロンの化学合成を続けました。そこからあちこちに地盤ができていく。すると、先生方が自分の研究として取り組み始め、もうアメリカに行く必要はない、と言い出す訳です。

岡野　日本の研究所に来る留学生の数が、アメリカと同じく多ければそれでいいんでしょうが…。

岡部　海外志向のない学生も企業に入れば、しっかり能力を発揮します。大学の仕掛けが緩すぎるのかもしれません。バブル崩壊後の「失われた20年」辺りから学生に縮み志向が蔓延したように思います。

岡野　ブラウン先生の研究所のように、きちんとしたマネジメントで研究を進めるというパターンが出来ていないのにお金だけがある、そんな状況が負の側面を強めているのかもしれません。さて、時間がまいりました。最後に放送大学についてご意見を。

根岸　幅広い年齢層の方が学ばれており、知識が次の世代へバトンタッチされ、さらに高いところへと活かされていく、そういう流れは素晴らしいことだと思います。日本はサイエンス立国になりましたが、中国・韓国・インドをはじめとした東南アジアはこれから20～30年で大きく変わるでしょう。ですから、日本もいろいろな試みをし、それをどんどんプロモートしていかなければ…。その意味で、放送大学はこれからもユニークでいいものを、世代を超えて紡いでいただきたいと期待します。

岡部・岡野　ありがとうございました。

特別講義『遷移金属触媒の魔法の力―サスティナブルな21世紀への鍵―』は本年4月より放送されます。たいへん分かりやすい講義ですのでぜひご視聴ください。くわしくは放送大学ホームページをご覧ください。

Tohoku Report 2014

原発被災地視察 今、改めてフクシマを考える

福島学習センター所長　森田 道雄

11月17日、放送大学30周年記念企画として「原発被災地視察　今、改めてフクシマを考える」を実施しました。視察参加者は在校生、卒業生あわせて33名、「今まで行きたくてもためらいがあった」「何度も被災地に行ったが案内人のあるのは初めて」「近くで避難してきた人と日々接しているが被災地の実際をこの目で確かめたい」など、高い目的意識を持って参加した人ばかりでした。

まず南相馬市原町区に到着。そこで、小高区地域協議会長島尾清助さんと合流し、バスの中で外の様子を見ながら被災地の現状を聞きました。国道6号線から塚原地区で下車、海岸まで300メートルほど歩き（写真）、残った護岸堤防の上で太平洋と津波でさらわれたこの地区の全景を目の当たりにして、津波被害のひどさを実感。広大な平地には壊れたコンクリートブロックの塊、流され転がって原形をとどめない車や農機具の塊以外は、一面の土ばかり。この地区では100名余が犠牲となりました。ここまでなら通常の津波被災地ですが、ここは放射能汚染によって、一旦は全住民が避難したところです。がれきの多くは一カ所に集められたものの、まだ地区外に運び出すことが出来ない。どこに置くのか行政と住民との丁寧な話しあいが不可欠です。島尾氏はけっして多数決では決められない、説得と納得でいくしかないと強調していたのが印象に残りました。

津波で壊された家の前を歩く

原発事故は「事件でもある」。東京電力が地震・津波への防御を怠り「安全神話」を振りまいてきたことへの怒りと同時に、自分たちにもなにがしかの責任もあると島尾さんは率直に語っていました。不通となっている小高駅前通も人影はなく、日中は誰でも立ち入ることが出来るのでたまに車が行き来しますが、やっとここまで外見は戻りかけている状況と、ここで生活をするためにはまだまだ障害がたくさんあることを実感でき、復興に頑張る人と直接話が出来て収穫でした。

島尾さんの説明を聞くツアー参加者

このあと相馬市塚田仮設店舗にある「報徳庵」で昼食、そして飯舘村にむかいました。峠を越えると、それまでゼロコンマ以下だった線量が徐々に上昇し、1マイクロSvを超え始めます。外の風景は、見事な山の紅葉なのに麓の方は除染した土色の農地と青か黒のシートで覆われた「汚染土」のかたまりが何十個と置かれ、それが次々に車窓から目に飛び込んできます。農地は草まみれの荒れ放題。

県道12号線沿いの草野地区は除染優先地区ですが、まだ1マイクロを超えています。そこから右折して綿津見神社に向かい、「自己責任」で下車して境内に入りました。本殿の落ち葉の近くでは線量計は3マイクロSv以上。あいにく話を聞く予定だった宮司が所用で不在だったのは残念でした。全員離村避難したものの神様を置き去りには出来ないと夫婦で神社を守ってきた人です。

おおよそ今まで報道などで知っていたことでしたが、実際見聞して災害のひどさを実感しました。しかし、放射能汚染という特殊な被害状態は目には見えない。「百見は一聞にしかず」で、見ただけではわからないことが説明を聞いてよくわかりました。聞かないとわからないことばかりだったとも言えます。視察にきてこの目で見られて良かった、頑張っている人の話が聞けて良かった、今日の経験は一生忘れないと、帰りのバスの中で交々、こうした感想が出されました。原発事故とそれによる「人災」ははかりしれない犠牲をこれからも福島県民に与え続けていくことを再確認した「充実の視察」でした。

地域のニーズに応える

特集

地域貢献プロジェクト

放送大学はこれまでも、全国の学習センター・サテライトを拠点として、さまざまな形で地域に即した貢献を推進しています。学生のみなさんの中には、すでに地域のリーダーとして、活躍されている方も多数おられます。今後さらに、このような活動をどのように活性化し、具体的に実現してゆくのか。未来に向けて、放送大学の発信力を、小寺山副学長が語ります。

放送大学の地域貢献

放送大学副学長　小寺山 亘

放送大学の役割は生涯学習にあることは言うまでもありませんが、生涯学習の目的は従来の「国民一人ひとりが文化的で充実した生涯を送るための学習」から「個人の自発的な学習にとどまらず、学んだ成果を地域活動や社会参加活動に活かすこと」へと移行してきています。

一方わが国は世界に先駆けて、急速な人口減少を経験しています。狭い国土、少ない資源を考えると、このことは決して悪いことではありません。しかしながら、その結果としての経済の急激な縮小とそれに伴う税収の減少に直面しています。したがって、いわゆる小さな政府を実現しなければ、当然の結果として財政の破綻を招かざるを得ません。遅まきながら官民を挙げて、小さな政府を実現しようと努めています。しかし、高齢者社会を迎えて、公共サービスを縮小することは容易なことではありません。ここで生まれてきたのが「新しい公共」の概念です。すなわち社会や人を支える役割を、「官」などの行政だけでなく市民や地域社会が担うとともに、その取り組みを社会全体で応援し「小さな政府・充実した公共サービス」を目指そうとするものです。

必然的に「新しい公共」と「学んだ成果を地域に還元する生涯学習」の二つの潮流が合流し、放送大学の役割は「生涯を通して学び、豊かな教養を身につけ、その成果を社会に還元する場を提供する」ことへと移ってきていると考えられます。

そこで放送大学では平成24年度に地域貢献研究会を立ち上げました。大学としてどのように地域に貢献できるのか議論するためです。得られた結論は本学の強みである「全国に展開した知の拠点（50か所の学習センター、7か所のサテライト）」、「即戦力の人材（9万人の社会人学生とそれをサポートする880人のセンター教職員）」、「強力な教育情報システム（全国に展開する放送授業・面接授業・公開講演会など）」の3点を活かした地域貢献事業を推進するということです。

平成25年度は地域のニーズに応える21の地域貢献プロジェクトを立ち上げました。調査によれば放送大学の9万人の学生の中には既に地域のリーダーとして活躍中の人たちが多数おられます。これらの人たちの活動を支援し、さらにそれに続く新しいリーダーを養成することを目的としています。この地域貢献プロジェクトは実行主体である学生が地域住民そのものであるという点で一般の大学と決定的に違います。つまり、「地域の課題を自らの問題として感じ、それの解決によって自ら利益を得る集団である」ということです。このことが、プロジェクトの永続性と健全性を保証するのです。

さらに、放送大学は組織として地域貢献を遂行する能力と義務を有していると考えられます。大学院修士課程の設置目的に「社会と地域の発展に寄与することを目的とする」とあり、さらに本年10月から博士課程の学生受け入れが始まりますが、その設置目的の末尾に「文化の進展並びに地域社会に貢献できる主導的人材を養成することを目的とする」と

謳っております。教養学部においては平成26年度から新しいエキスパート「地域貢献リーダー人材」を立ち上げることとしています。

これらのことは放送大学は地域の問題に学問的に取り組める専門性を持った専任教員を多数擁しており、組織として既に決意していることを意味しています。

本年度開始した21のプロジェクトを通して、地域の発展に貢献するとともに、21世紀の日本のリーダー人材を輩出することを願っています。紙面の都合で以下にご紹介する3つのプロジェクトはその一端に過ぎませんが、特徴的な例を選んでいます。この他にも楽しいプロジェクトが全国で進行中です。全体の情報は放送大学ホームページをご覧ください。

岩手学習センター

被災地復興を考える現地視察型研修
～地域貢献、私たちが伝えるべきこと～

岩手学習センター所長 齋藤 徳美

岩手学習センター開設20周年記念地域貢献プロジェクト

あの、3.11東日本大震災から2年半が過ぎたが、復興はまだまだ、課題は山積である。

齋藤は、地域防災の専門家として、長年にわたり三陸沿岸の津波防災に関わってきた。また、被災後は、岩手県の復興計画の立案と施行管理を行う委員会の委員長として、繰り返し現地に足を運び、岩手をはじめ各地の学習センターで一般市民も対象に減災と復興に関する特別講義を多数行なっている。しかし、これまで、現地を巡り被災の実態を理解したいとの学生さんの要望に応える機会を持てなかった。

堤防が破壊され家屋が流失した釜石市唐丹地区

そこで、岩手学習センターが開設20周年を迎えるのを機に、セミナーで津波災害の危機管理や復興の課題を学ぶと共に、被災地を視察し被災の実態把握と自らができる復興支援を考える以下の企画を実施した。

第1回

9月7日 セミナー
「津波災害の危機管理」
越野修三 岩手大学地域防災研究センター教授
（元・岩手県防災危機管理監）
「3.11大津波から2年半を振り返る」
齋藤徳美 所長

9月8日 現地視察
遠野市：後方支援拠点施設
陸前高田市：高台から被災市街地展望・奇跡の1本松
大船渡市：旧大船渡駅周辺・三陸町越喜来周辺
釜石市：唐丹地区・釜石駅周辺

市街が壊滅した陸前高田市、老保施設松原苑屋上から

第2回

9月22日 セミナー
「鵜住居の犠牲をいかに次代に生かすか」
齋藤徳美 所長

9月23日 現地視察
釜石市：釜石港周辺・鵜住居防災センター
（避難者約200名が犠牲、遺族の連絡会会長さん案内）
大槌町：旧役場
山田町：商店街跡
宮古市：田老地区防潮堤・田老観光ホテル（保存遺構）

津波遺構として保存される田老観光ホテル前で、参加者

研修には、津波で家族を失った方、ボランティアで支援を行なっている方、初めて現地を訪れる方など、延べ54名の学生が参加。齋藤所長や現地の被災者の生々しい説明を受け、メディアが伝えきれていない被災の現状に接することができた。帰途の車中では、放送大学で育んだ知識や知恵をもとに、どのような復興支援ができるかなど活発な意見交換が行われ、共に支え合ってめざす減災や復興のあり方について認識を新たにした。

放送大学の学生さんは、地域の中でしかるべき役割を果たせる立場にいる方が多い。県の復興計画の柱である「なりわいの創成」「安全なまちづくり」「暮らしの再建」に、岩手学習センターは、地域人材の育成の担い手として、さらに貢献したいと考えている。

世界遺産登録を見据えた「富士山学」の構築と地域リーダーの育成

静岡学習センター所長 高木 敏彦

通勤の際に車窓から四季折々の富士山に接することが多い。その都度いろいろな想い（安らぎ、鼓舞、威圧、清涼感…）が浮かんでくる。日本人の心を揺さぶる不思議な山である。

この６月、「富士山 ──信仰の対象と芸術の源泉── 」として世界文化遺産に登録された。信仰に関しては、古くは噴火を繰り返す富士山を神が宿る山として畏れ、山岳信仰と密教等が集合した修験道の道場として、さらに江戸中期には富士講として多くの人々が登山、巡礼をおこなうようになり、現在も多くの登山者が山頂を目指している。また、芸術面では、万葉集をはじめとした古典作品、芭蕉、蕪村の俳句、漱石、太宰の作品など多く取り上げられている。絵画ではゴッホ、モネなど印象派の画家に影響を与えた北斎、広重の浮世絵を代表に江戸時代には多くの画家、文人が題材としており、近代では著名な画家らも描いている。これらは富士山の景観・自然の存在の上に成り立っているものであり、25からなる構成資産を含めた富士山全体を一体のものとして保護・保全する方針・仕組みを定めることが求められている。その保護・保全には行政機関、地域住民やNPO等が協力して実施し、後世に引き継いでいく必要があろう。

このような想いをこめて、静岡学習センターでは、富士山を取り巻く諸分野を探求する「富士山学」を構築するとともにこれらの幅広い知識に裏付けられた地域リーダーの養成を目指してプロジェクトを立ち上げ、実施した。以下にその概要と展望を述べるが、詳細は放送大学HPの「地域貢献への取り組み」欄をご覧ください。

富士山本宮浅間大社。ボランティアガイド説明

本年度は、富士山中腹にある県立の研修施設「富士山麓山の村」を会場として、学生と一般市民合わせて89名の参加者を得て、9月7日・8日（1泊2日）の日程で実施した。「富士山学」の講義として3件、①世界文化遺産申請の概要（静岡県文化観光部　小野聡氏）、②富士山の自然 ──森林植生──（静岡大学特任教授　増澤武弘氏）、③富士山信仰（富士山本宮浅間大社宮司 中村徳彦氏）、フィールドでの参加型体験学習として①ブナ林の観察会（植生の遷移など）②樹木の管理体験（枝打ち、間伐）③構成資産見学（白糸の滝、富士山本宮浅間大社）を行った。また、第1日目の夕食後は、小野聡氏を中心に申請に伴う裏話や今後の課題等についての学習会を、2日目朝食後は本プロジェクトに関する意見交換会を催した。

ブナ原生林での体験学習班。増澤教授

参加者へのアンケート調査によると、「宿泊することで時間を作り、講師らと語らい参加者同士意見を出し合うことでより深く富士山学を知識として知り得た。その上参加型体験学習や構成資産の見学により、より印象深い富士山学の学習となった」など、参加者の多くは今回の企画に賛意をしめしており、次回への期待の声も多かった。

高枝切り鋸を使って枝打ち体験

次年度以降、学習センターとしては「富士山学」「地域リーダー育成」に関わる面接授業を充実するとともに、現在活動中の富士山の保護・保全活動への参画を念頭に置いた体験型の企画を検討する予定である。

高知学習センターの地域貢献プロジェクトの取り組み

高知学習センター所長 石川 充宏

高知学習センターの地域貢献プロジェクトの取り組みは、地域人財発掘・育成プロジェクトとして「看護り（みまもり）人財の育成」と「地域人財育成道場」の二つの計画を実施しています。

高知県は、「日本一の健康長寿県構想」を県の重要施策の一つとして掲げ、保健・医療・福祉の各分野で様々な取り組みを展開しています。この取り組みに関連し、高知学習センターでは地域医療分野における「新人看護職員が定着しない」という課題に対応するため、地域人財育成に係る高知県との連携事業「看護り（みまもり）人財の育成」を計画しました。

この事業は、行政、教育、看護協会など県内の看護に関わる団体が参加し、「高知県新人看護職員研修推進協議会」（以下協議会とする）を組織し、研修に係る企画・実施については高知学習センターと連携して行うことにいたしました。

1．ブロック別研修会＆学士説明会の開催

平成25年の7～8月にかけて、5ブロックの新人看護職員育成に対する放送大学に期待するニーズの調査を実施。各ブロックから提出されたニーズをもとに、平成25年の12月から平成26年の1月にかけて、研修会（講演会・実技講習会）を協議会と共同企画で開催する事を決定しました。

・講演会「エビデンスに基づく看護技術の実践」、「エビデンスに基づく吸引の技術」

・実技講習会　プリセプター・教育担当者の「教える力」向上のための講習会

2．各ブロックの拠点施設（拠点病院）へ放送大学看護系科目テキスト36冊を寄贈

この取り組みの狙いは、放送大学を活用した学士（看護学）の学位取得について地域の看護職の方々へ周知することであります。実際にテキストを手にして、本学のカリキュラムと教育内容の優れた点を理解していただき、本学への入学・学習へとつなげられたらと考えています。

寄贈した拠点施設のリーダーの県看護協会長と各病院看護部長からは、感謝とともに「テキストを活用して新人看護職員教育の推進を図りたい」との言葉がありましたので、今後大いに期待するところであります。

地域人材育成では「地域人財育成道場（入門編）」として、今年度は「ファシリテーション力養成道場（平成26年2月7日・8日）」「プレゼンテーション・話し方講座（平成26年3月15日・16日）」「地域に関する課題探求セミナー（平成26年3月中旬）」の3つの講座を開催します。

この講座では会議やミーティングなどにおいて、意見を整理したり、認識の一致を確認する行為などにより合意形成を支援し、議論を活性化させる手法（ファシリテーション）や、プレゼンテーションスキル、高知県における課題を学び、地域に関わる人材に必要な基礎的知識と能力の修得を目指しています。

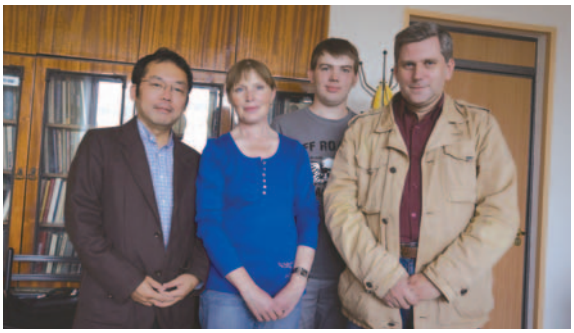
今年度から始めた地域貢献プロジェクトですが、一人でも多くの学生が放送大学で得た知識と教養を活かして、社会に必要な人材になってくれることを願っています。

物質機能の多様性を物理学で探る

自然と環境コース・
自然環境科学プログラム 教授 岸根 順一郎

放送大学での学部、大学院研究指導は、同じく物理学担当の米谷民明先生と一緒に進めています。学生さんの研究テーマは、相対性理論、場の量子論といった基礎的なものから、半導体、太陽電池、摩擦といった産業技術と直結するものまで実に多様です。大学院のレポート発表会では、いろいろなテーマが次々と繰り出され実に刺激的です。学生さんによって持ち込まれたテーマを楽しみながら、如何にしてそれを物理学のトラックに載せるか考えるのが我々の役割です。私は2013年4月に着任したばかりですので、直接大学院生を指導するのは2014年4月からということになります。博士後期課程も設置されましたし、今後物理学に基づいて先端産業技術のブレイクスルーを担うような人材の養成にも力を注ぎたいと考えています。

私自身は「物質機能の多様性の探究」を研究テーマにしています。凝縮系物性理論（物性物理学）と呼ばれる分野です。人間社会と同じように、物質中の電子は集団化することで単純な個性からは予想もつかない多様な性質をあらわします。この「創発性」と呼ばれる性質が、磁性や超伝導といった物質機能の根源です。創発性は電子集団が統計的に示す性質であるため、そのありかたには無限の可能性があります。物質における創発性のありかたを理論物理の方法で探究し、物質の状態を制御する仕組みを解明することが私のライフワークです。研究は国内外の多くの研究者、特にロシアのグループ（写真）と一緒に進めています。



共同研究を進めているエカテリンブルクのメンバーと

ヒューマンコンピュータインタラクションの研究

情報コース・
情報学プログラム 准教授 浅井 紀久夫

ヒューマンコンピュータインタラクションを漢字で書けば、人間電脳相互作用となるでしょうか。こう書きますと、何か怪しい研究をしているような印象を受けますが、人間とコンピュータとの相互交流のやり方を探求する研究分野です。端的に表現すれば「使いやすいシステムを考える」となるのでしょうが、大きさや形状といった物理的側面だけではなく、人間の情報処理能力や知覚特性にも配慮したデザインにします。

実際に形にするものづくりに拘って研究を進めています。ものづくりには技やノウハウが詰まっており、作る人の心が宿ります。人間の行動を検出するセンサと、情報を人間に提示するマルチメディアとを巧みに組み合わせることにより、人間とコンピュータをつなぐもの（インタフェース）を作り、新しい価値を与えます。

写真は、放送大学に構築している没入型VR（バーチャルリアリティ）システムです。立体視映像と立体音響でユーザを囲い、あたかもそこにいるような感覚を提供します。こうしたシステムを複数、ネットワークでつないで、臨場感を伴った遠隔コミュニケーションの実現を目指しています。

放送大学にある没入型VRシステム

これに関連し、現実世界に仮想物体を融合する拡張現実感にも興味を持っています。拡張現実感環境では、現実物体と一体化した情報の操作ができるようになるため、触知感覚を伴ったインタラクションが可能です。科学館展示などに応用することを念頭にシステム開発を行っています。

北海道学習センター

札幌市北区北17条西8丁目（北海道大学構内）〒060-0817
JR札幌駅北口から約20分　電話:011-736-6318

緑豊かで広大・閑静な北海道大学の構内に北海道学習センターはあります。しかも建物のすぐ裏手には生協と学生食堂!便利です。この恵まれた環境の中で学生たちは学んでおります。所属する学生数は約4,000名、全国の学習センターのうちでも上位にランクされます。

では、当学習センターが誇る2名の学生を紹介します。放送大学最高齢（96歳）の学生Kさんと、放送大学大学院修士課程修了後に北海道大学大学院博士課程に進学したTさんです。Kさんの外見は若々しく、立ち居振る舞いも高齢であることを少しも感じさせません。立派なキャリアをもっていながら、発想・思考が柔軟で、過去の経験や実績にすがるところがないことには驚かされます。

Tさんは、趣味として始めた小さな生物の研究を学部・大学院で継続する過程で、研究レベルを次第に高めていきました。「生息環境→広域環境→生態系→環境と社会→人間と環境」という具合に視野と研究領域を広げ、今年の4月には共著を刊行するに至っております。今や押しも押されもしない立派な研究者です。

また、当学習センターでは年1回「研究発表会」を開催し、修論・卒論の執筆者3名による口頭発表を行っていますが、この発表会の独自性は、質疑応答に先立って各発表に対して客員教員がencouragingなコメントを加えるという点にあります。昨年からこの方式を取り入れていますが、発表内容への理解が高まることから発表者と聴衆の双方に好評を博しております。

研究発表会の様子

熊本学習センター

熊本市中央区黒髪2-40-1（熊本大学内）〒860-8555
JR熊本駅前からバスで40分、または交通センターから30分　電話:096-341-0860

東は雄大な阿蘇山、西には海の幸とキリシタン文化で有名な天草などの自然に囲まれた九州の「へそ」の位置にある「森の都」熊本市。市の中心部から北東方面に少し離れた熊本大学黒髪キャンパスに熊本学習センターはあります。熊本大学前バス停を降りて旧制第五高等学校時代の赤門を通り抜け、学習センターへ向かう道すがら年中季節の移ろいを、そして、隣接する熊本大学附属中央図書館と併せて勉学の環境の良さを感じるところです。

学習センターでは、県内の各市教育委員会との共催で「どこでも生涯学習」と称した地域学セミナー事業を実施しており、第7回目の今年度は世界産業遺産化を目指している三池炭鉱・万田坑をテーマに開催し参加者から好評でした。また、天草における全5回にわたる「ふる里創生地域リーダー養成プロジェクト～ヘルスプロモーションボランティア育成プロジェクト～in天草」や熊本さわやか長寿財団と連携した3回シリーズの生きがいづくり支援セミナー、ほぼ毎月の公開講演会の実施など、地域貢献にも取り組んでいます。また、在学生による「学習成果報告会～放送大学と私～」も毎年開催し、発表内容を小冊子「学びへの招待状」に綴って広報するなどの取り組みも行っています。同窓会「熊放会」（在学生入会可）や心理・カウンセリング研究会等各種学生団体の活動も活発です。皆さんもぜひ熊本の面接授業と熊本の自然を楽しんでみませんか。

研修旅行

哲学への誘い（'14）

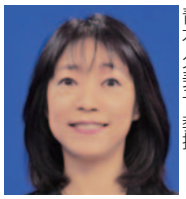
放送大学教授（人間と文化） 佐藤 康邦

佐藤 康邦 教授

本授業は、基礎科目とはいえ、そこからすぐに連想されるような単なる初等の入門篇ということを超えた内容を目指したものである。古代ギリシャと言っても、プラトンやアリストテレスの登場回数はそれほど多くはない。それだけではなく、プラトンなどもっぱら恋愛文学作者として登場する位だ。しかしそれでも、この授業を取った方が、単にプラトン哲学に関する概略的な知識を得たというのではなく、プラトンのイデア論の醍醐味にわずかでも触れたと思えるように工夫はしたつもりである。そのことは、ドストエフスキーや森鴎外、アルベルティやセザンヌといった哲学の専門家ではない人々を扱った場合にも言えるのであって、一見、哲学と関係のない話を聞かされていると思っているうちに、いつの間にか哲学的な議論に引き込まれてしまっていたということならば、私の目標のなかばは達成されたというべきであろう。人文科学としての哲学というものはそのようなものではないかという想いが私にはあるのだ。

日常生活のデジタルメディア（'14）

放送大学教授（情報） 青木 久美子　放送大学准教授（情報） 高橋 秀明


青木 久美子 教授

高橋 秀明 准教授

日々の生活の中で、何気なく使っているデジタルメディア。デジタルメディアなしで生活をすることは難しくなってきている現代。そのような時代に、学生の皆さんが、我々の生活の至る所に見られるデジタルメディアに意識的に向かい合い、デジタルメディアを理解しながらより効果的に適切に活用できるように、ということを考えてこの科目を作成しました。デジタルメディアは、その技術的な面に注目されますが、様々な形で我々の生活に影響を及ぼしているばかりか、我々の社会にも影響を及ぼしています。そしてまたデジタルメディアも、我々の文化的・社会的・経済的なさまざまな要因に影響されて現在の形が形成されてきています。デジタルメディアは日々進化しています。この科目では、そのような日々の変化に左右されない根底の考え方や枠組みを抽出して、社会と人間とメディアの3つが相互作用して作り上げたこの日常生活のメディア環境というものを考えていきます。

情報社会の法と倫理（'14）

放送大学教授（情報） 尾崎 史郎　放送大学教授（情報） 児玉 晴男

尾崎 史郎 教授

児玉 晴男 教授

インターネットやモバイル端末などの発達、普及した今日の情報社会においては、文章、画像、音声等の様々なコンテンツをはじめとする大量の情報を、誰でも容易に発信し、利用することができるようになっています。大量の情報発信や利用が放送局、出版社など一部の業界に委ねられていた時代には、情報の発信や利用に関係の深い情報倫理や諸法令は一部の専門家が知っていれば足りると思われていました。しかし、ホームページやブログなどにより、誰でも簡単に世界中に情報発信を行うことのできる時代を迎え、これらは全ての人が関係するものとなっています。

そのため、この講義では、情報倫理、コンテンツ保護の基盤である著作権をはじめとする知的財産権、個人情報やプライバシーなど、情報やコンテンツの発信や利用に関係深い事項を取り上げ、情報社会で活動するために必要となる法や倫理を身につけることを目標としています。

解析入門（'14）

慶應義塾大学教授
（放送大学客員教授）河添 健

河添 健 教授

数学の面白さの一つは既知の理論を拡張することです。それにより何か新しいことが起こり、新しい応用が広がればこの上なく楽しくなります。この講義では高校のときや『微分と積分』で学んだ一変数関数y=f(x)の微分や積分を、二変数関数z=f(x,y)や複素関数w=f(z)に拡張します。グラフの接線の概念が曲面の接平面に広がり、曲面の極小や極大を求めることができます。また図形の面積や体積が重積分で求まるようになります。複素関数は実変数xを複素変数zに置き換えただけですが、まったく新しい微分と積分の世界が広がります。美しい定理がたくさんあり、それらを用いるとガウスが証明した代数学の基本定理――n次方程式は重複度含めてn個の解をもつ――の証明を与えることができます。今回はラジオでの講義ですので、テレビと違って視覚に訴えることができません。難しい数学の勉強がさらに大変になってしまうのではと心配されるかもしれませんが、印刷教材を手元におき、y=f(x)の微分と積分を復習しながら、着実に勉強していきましょう。

感染症と生体防御（'14）

放送大学教授
（生活と福祉）田城 孝雄
東京大学教授
（放送大学客員教授）北村 聖

田城 孝雄 教授

北村 聖 教授

感染症と生体防御（'14）は、2008年開講の前講座を踏まえ、講師陣を新しくして開講するものです。感染症は、人類にとって大きな脅威でした。そして今でも大きな脅威です。新型インフルエンザや、風疹の流行など、大きな社会問題にもなります。抗生物質の発見と開発、予防接種などの予防医学、公衆衛生の進歩により、感染症は克服されつつある思われた時もありました。しかし新しい感染症（新興感染症）が登場し、世界的な脅威になっています。また、一旦克服されたと思われた感染症の中に、再び増加して、問題となっている感染症（再興感染症）もあります。さらに、従来の治療薬の効果がみられなくなっている感染症もあります。感染症は、私たち人類にとって、大きな影響を与えます。そこで感染症について学び、対策について知識を得る必要があります。感染症と生体防御について、基礎医学・臨床医学の専門家が、一般教養科目として、分かりやすく説明しています。

また、この「感染症と生体防御」は、放送大学関連校である看護師養成学校で、卒業単位としている放送授業科目の1つです。看護師国家試験出題基準に準拠しています。

中高年の心理臨床（'14）

放送大学教授
（心理と教育）齋藤 高雅
筑波大学教授
（放送大学客員教授）高橋 正雄

齋藤 高雅 教授

高橋 正雄 教授

臨床心理学領域では、ライフサイクルの視点から「乳幼児・児童の心理臨床」「思春期・青年期の心理臨床」が開設されています。しかし、少子高齢化の現在、その後の発達段階の心理臨床科目が作成されていませんでした。今回、ようやく「中高年の心理臨床」が開設されました。

わが国は平均寿命の延びとともに老いの様相も変化し、元気な高齢者が増え、多くの人が80歳、90歳と生きることが可能となる一方で、介護を必要とする寝たきり状態や認知症の高齢者も増えてきています。

また、働く人びとの中で精神疾患で休職する人の割合が増え、特にうつ病で受診や入院する人が増えています。高齢者ではアルツハイマー病などの認知症で入院する人が増えています。このような社会の中で、いかに生きるべきか、人生後半の生き方を考える必要が生じています。本科目が、中高年期の心の健康問題を考えるに当たり、また中高年期の心理臨床の実践に際して、お役に立てれば幸いです。

管理会計('14)

放送大学准教授（社会と産業） 齋藤 正章

齋藤 正章 准教授

会社のように組織化する長所は、1人では困難な事業を組織の成員間でリスク分担し、目標達成を可能にすることにあります。しかし、同時に組織内では様々な問題が生じることも事実です。それは、意思決定の問題と業績評価の問題に大別されます。そして、この問題を扱うのが管理会計です。

組織目標を達成するためには、情報を収集し、代替案の中から最良のものを選択しなくてはなりません。この意思決定を支援するために、意思決定プロセスやそのルールについて学習します。また、負担したリスクに応じて成果を分配することを業績評価といいます。成員間でどのように成果を配分するのが組織目標にかなうのか、業績評価のプロセスとそのルールについても学習します。

経営環境が厳しい今日では、組織が失敗する可能性が著しく高まっています。経営者はこれまで以上に、権限と責任の配置に代表される組織内資源配分をうまくやらなくてはなりません。この問題を皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

ヨーロッパ文学の読み方—古典篇('14)

放送大学教授（人間と文化） 宮下 志朗　放送大学准教授（人間と文化） 井口 篤

宮下 志朗 教授

井口 篤 准教授

ホメロスから始まり、ヘロドトス、ソポクレス、ウェルギリウスなどを経て、中世の「トリスタンとイズー」へ、そしてダンテ『神曲』、ボッカッチョ『デカメロン』、チョーサーの『カンタベリー物語』、最後にヴィヨン、『ティル・オイレンシュピーゲル』、ラブレーと、ヨーロッパを代表する「古典」が勢揃いしています。名前は知っていても、読んだことはないという学生さんが大半かもしれません。「文学」の「古典」というと、それだけで敬遠されがちですからね。でも、「食わずぎらい」の人生が損なことは、食べ物でも、文学・芸術でも同じです。

本科目で、ヨーロッパの古典をぜひとも試食してみてください。きっと、みなさんの味覚に合う作品が見つかりますし、これはやはり完食しなくてはという情熱がわき上がってくるにちがいありません。講師は5人で、西洋古典文学の権威、中務哲郎京大名誉教授を筆頭に、いずれもその分野の優れた専門家です。作品のさわりの朗読をまじえながら、個性豊かに、解説します。本物の古典にふれるまたとない機会です。お聴きのがしのないように。

国際ボランティアの世紀('14)

放送大学教授（情報） 山田 恒夫

山田 恒夫 教授

東日本大震災において、わが国も多くの海外ボランティアを受け入れました。その後も世界では大災害や紛争が頻発し、そのたびに国際的な援助活動が実施され、そこでも多くの国際ボランティアが活躍しています。こうした社会状況をうけ、世の中では国際ボランティアに対する関心も高まりを見せています。

本科目では、こうした国際ボランティア活動に関わる諸問題を、国際ボランティア学という新たな学問分野から学びます。本分野のパイオニアといえる先生方を講師にお招きし、第一線でリーダーとしてご活躍のボランティアにゲスト出演いただき、現場での最新映像も埋め込みながら、解説しています。

また、本科目では、どうしたら国際ボランティア活動に参画できるのか、キャリアアップや「人生・生活の質（Quality of Life）」の向上にどう生かせるのか、といった身近な問題にもお応えします。本科目で学んだことは、単なる知識の獲得にとどめず、実際の国際ボランティア活動を通じ社会に還元いただければと願っています。

福祉政策の課題―人権保障への道―('14)

放送大学教授（生活健康科学プログラム） 大曽根 寛

大曽根 寛 教授

社会福祉の政策は、近代社会とともに展開し、定着してきたと言っても良いが、実は、21世紀に入るころから大きな曲がり角にあった。この講義では、20世紀に形成された近代的な福祉政策の歴史的な発展過程を追いつつ、人権理念を背景に政策の範囲と内容を豊かにしてきたことを理解する。また、21世紀の福祉政策の特徴を明らかにするとともに、今後の制度のあり方を立案するための、人権論的な基礎と歴史的背景から見えてくる政策課題を考察することとする。少子高齢化、国際化の進展の中で、今後の福祉政策にも大きな変革が求められてくることとなるからである。

そこで本教材では、①福祉政策理念の形成過程を明らかにし、②近代経済の展開の要素である企業と市場が福祉政策とどう関係しているのか、人権視点から浮き彫りにした。③そして貧困、生命、健康、精神、身体、死亡、刑罰などの論点を示した上で、④人権は社会的連帯により実現されることを明らかにした。

人的資源管理('14)

放送大学教授（社会経営科学プログラム） 原田 順子　大阪国際大学教授（放送大学客員教授） 奥林 康司

原田 順子 教授

奥林 康司 教授

人的資源管理とは、継続的事業体（going concern, Betrieb（ドイツ語））において、人を対象とした管理の仕組みを総称した概念です。現代社会では、企業をはじめとする「組織」と「そこで働く人々」の社会的影響は計り知れません。私たちは人的資源管理について3つの柱（①トップ・マネジメントの視点、②担当者の視点、③企業と社会の視点）から説明しようと決めました。社会全体から人材について考えるような構成で、全15章・回は以下のように3部から成っています。

Ⅰ.人的資源管理の基礎知識（第1～3章・回）:トップ・マネジメントの視点
Ⅱ.人的資源管理の制度と機能（第4～10章・回）:担当者の視点
Ⅲ.多様な労働者たち（第11～15章・回）:企業と社会の視点

また放送授業は、ロケ映像やスタジオ・ゲストの登場により、知的刺激に富んだものに仕上がりました。「基礎」から「応用」まで段階をおって学習することで、人的資源管理の全体像を理解することを目標としています。

物質環境科学('14)

放送大学教授（自然環境科学プログラム） 濱田 嘉昭　学習院大学教授（放送大学客員教授） 花岡 文雄

濱田 嘉昭 教授

花岡 文雄 教授

私たちの生活・生存はさまざまな環境条件によって制約を受けると同時に、何らかの相互作用を通じて環境に影響も与えている。特に、現代の人間活動の自然・社会環境への影響は計り知れない。どのような環境条件と相互作用があるのか、その仕組みも含めて考えることを科目制作の基本方針とし、化学的視点に重点を置きつつ、宇宙、地球、海洋、生態系といったマクロな環境から遺伝子DNAの変化に至るミクロな科学まで、より幅広く環境問題を取り扱った。

現在の日本に住む私たちの環境に関する関心ごとのトップは放射線の健康影響であろう。生命活動の中枢とも言うべき核酸DNAに損傷が起これば、重篤な健康異変につながる可能性がある。一方で、生命はこれらの損傷を修復する機能も持っている。現在の科学的知見を動員して、これらの国民的関心ごとにも応えられるように配慮した。同時に開講される学部科目「生活と化学」と合わせて、履修していただくことを願っている。

自由、自律、自主性

生活と福祉 教授
生活健康科学プログラム
附属図書館長
松村 祥子

私の好きな言葉として、「自由」、「自律」、「自主性」があります。大勢の仲間と日暮れまで外遊びに明け暮れた活発な子ども時代から現在まで比較的良好な心身の健康を保つことができたのは、いろいろな場面でこれらの3つを自分の行動基準にしてきたからかもしれません。

この20年間専任教員として勤務した放送大学では、自主的に学ぶ学生さんとの多くの出会いがありました。広い視野をもち、新しい研究・教育に挑戦する先生たちとの交流も刺激的でした。さらに多様な経験をもつ職員の方々と共に働くことができたことも幸いでした。

「立場にとらわれず利害にこだわりすぎない自由」、「自分の思いを大事にして自分の行動に責任を持つ自律」、そして「少しでも高い文化への選択ができるような自主性」をこれからも目指していけたらと願っています。

大変お世話になりました

生活と福祉 教授
生活健康科学プログラム
臼井 永男

1986年4月に赴任してから28年が経過しました。一中小企業からいきなり本学の教員に採用されるとき、人事の担当者から「本当に来てくれるのでしょうね」と、何度も念を押されました。生涯学習と大学改革をねらいとした新しい大学を、正に築き上げていくような心持でありました。人生の一番充実した時期を、最高の環境のもとに過ごすことができましたこと、改めて感謝御礼申し上げます。放送大学は教員と事務員と学生の三本柱によって立っております。多くの皆さんにご指導をいただきましたが、とりわけ学生の皆さんにはたくさんのエネルギーをいただきました。学習センターに所属し、多くの皆さんとの交流がなければ、このような長期に渡って仕事を続けることはできなかったと思います。今後は、次の代に引き継ぐため、足腰が丈夫なうちに山の下刈りや田畑の草を引き、地球の表面を少しだけ掃除しておきたいと考えております。ありがとうございました。

さまざまな出会い

心理と教育 教授
臨床心理学プログラム
齋藤 高雅

放送大学に2004年着任以来、10年になります。主に大学院科目を担当し、「臨床心理学特論」、「臨床心理学研究法特論」、学部では「心の健康と病理」、「中高年の心理臨床」を作成しています。臨床心理学プログラムでは、「心理査定演習」、「臨床心理基礎実習」、「臨床心理実習」では各地の実習機関への依頼・挨拶を通して、さらに、修論や卒業研究の指導ゼミなどで多くの人びとと出会いました。学生は、地域的にも、年齢的にも、働く場もさまざまな人々で、放送大学ならではの出会いがあり、私にとってもこれまでの通学制大学では味わえない豊かな交流と学びの場でした。「臨床心理」という共通のテーマを通して、多様な視点からの討議は意義深く、学生の職場での対応だけでなく、多彩な職場の参加者がいることで、ケースの流れと全体像を俯瞰する機会となり、全員にとって今後の活動に有益な場になったと思います。放送大学皆様のご活躍を期待しています。

放送大学の枠を超える教育成果に挑む

社会と産業 教授
社会経営科学プログラム
小倉 行雄

通信教育制の放送大学には、日常的な通学には困難を抱えるが、勉学の意欲に燃える人に対し、広く門戸を開く利点があります。しかし、ここでの学びを外部に通じるたしかなものにしようとすると、教える側としてもまだまだ試行錯誤であるのが現実です。

私の場合は、3年の任期（2011年4月～2014年3月）という制約の中でこの難題に挑んだのが実相です。まずは任期が短いので、2011年度に「経営学入門（'12）」と「ケースで学ぶ現代経営学（'12）」の2つの科目づくりを同時に行いました。テキストの原稿書きからテレビ・ラジオの収録まで何とか1年で終えました。その後は通信教育の大学院ゼミでどれだけ学生に力をつけるかの取り組みです。「論文づくりで仕事の基礎力をつける」を合言葉にして、次のようなことを行ってきました。論文づくりのプロセスを標準化するための自前のテキスト作成。毎月の宿題とゼミ報告づくりをゼミ生に課すことで、日常的なレベルから書く力をつける。TAは4人体制にし、チーム医療的なかたちで学生指導にあたる。フィールドワークに活発に取りくむことで、現場から学ぶ姿勢をゼミ生に伝える。公開授業や公開講演会、ゼミイベントを多彩に開催することで、学びの活動と現実を近づけるなどです。

これらで外部に通用する人材づくりと教育成果がどこまで達成できたかといえば、道半ばであることも事実です。それでも、こうした試みが放送大学の教育品質を高めるたしかな途であると思います。拙い実践が放送大学の教育価値を高める一助になれば幸いです。

放送大学に感謝を込めて

社会と産業 教授
社会経営科学プログラム 西村 成雄

この6年間、主な授業科目として「現代東アジアの政治と社会」（学部）や「20世紀中国政治史研究」（大学院）などを分担し受講生の鋭い指摘に刺激を受け、ゼミでは豊富な社会経験をお持ちの方々との緊張した、しかし充実した時間を過ごす機会をいただき、また十数か所の学習センターでの面接授業や市民講座で、多くの受講生に対面対話できましたことに心からのお礼を申し上げます。

21世紀世界は明らかに新たな歴史的段階に入っています。この構造的変容を国際政治学や地域研究を通して、少し長い歴史の奥行きのなかに位置づけつつ総合的にとらえる必要性がより一層増大しています。放送大学ならではの実に数多くの授業科目は、現代社会と未来社会の平和構築にとって重要な「視点と支点」を提供しています。私も放送大学の多くの受講生とともに、これからも学び続けてゆきたいと思います。

放送大学のますますの発展と学生院生諸兄姉氏の学問への新たな挑戦を期待して。

放送大学退職の辞

人間と文化 教授
人文学プログラム 佐藤 康邦

それまで放送大学とは縁がなかったので、右も左も分からぬ状態で始めた放送大学での8年間であったが、そろそろ40年に達しようとする私の大学教員生活の最後にここで働くことができたのは、私の人生における幸運であると思っている。教員である以上、教えることに力を尽くさなければならなかったことは言うまでもない。私の担当する哲学の領域には私一人しかいないので、多方面に目を配る授業を作らなくてはならなかったということがあって、それはそれで大変ではあったが、そのことが、私の生涯にわたり考えたことや、勉強しておいたことをまとめさせてくれたということもあった。御蔭で到底日の目を見ることなどありそうもないと思っていた知識を文章化することもできた。しかし、それにも増して重要なことは、放送大学の学生の皆さんと御付き合いできたことだ。様々の年齢の、様々の経歴を経た、様々の関心を持たれている皆さんに接し、一番多く学んだのは私の方であったと確信している。皆さん有難うございました。

放送大学の宝もの

情報　准教授
情報学プログラム
教育支援センター 川淵 明美

放送大学には5年間在職させていただきました。決して長い期間ではありませんが、たくさんの素敵な思い出があります。

最初に思い浮かぶことは大先輩である一人の先生の言葉です。それは「放送大学には3つの宝ものがあります。全国テレビネットと丁寧な作りの授業番組、全都道府県にある学習センター、そして勉強したいという熱意を持つ学生さんです。」というものです。私は学生さん達と直接触れ合うことのできる面接授業が大好きです。先日もある面接授業で「私はどうしても好奇心をなくすことができないのです。」とおっしゃる80代の学生さんにお会いして、なんて素敵な人生の大先輩なのだろうと感銘を受けたばかりです。

私はその3つの宝ものにもう一つ宝ものを追加したいと思います。それは教職員の皆さまです。先生方は、放送大学はオンリーワンを目指すという使命感のもと、質の高い教育を追求し、様々な工夫をし、熱意と愛情を持って教育活動を行っていらっしゃいます。その取り組みは、放送大学の教員として当たり前の域を超えるものです。ある先生が「放送大学が好きすぎて困ってしまう。」とおっしゃったときも、なんて素晴らしい先生なのかしらと感動を覚えたものです。こんな素敵な宝ものを4つも持っている放送大学に在職してキラキラ輝く皆さまとお会いできたことをとても幸せに感じます。本当にありがとうございました。放送大学のますますのご発展をお祈りしています。

数々の楽しい思い出

自然と環境 教授
自然環境科学プログラム 松本 忠夫

振り返ると、私にとって2005年からの放送大学での9年間は瞬く間にすぎた感じですが、とても充実した思いのある期間でした。毎年のように行った新たな授業科目の作成、全国あちこちでの面接授業、卒業研究生および修士院生への指導会、研究発表会、審査会では、どれをとっても私は緊張していましたが、理知的な制作スタッフ、非常に熱心な学生さんたちに出会え、楽しく刺激的でした。特に、放送教材作成にあたって外国でのフィールドロケを、ハワイ、ニュージーランド、ケニア、マダガスカルで5回も、また、国内では西表島、小笠原諸島、佐渡島、知床半島など遠隔地で行うことができたのは多いに満足しています。それらの映像が授業内容の理解に良く役立っていると評価していただけたとしたら本望です。毎月開催される教授会と、コースでの定例会議や談話会、毎日午後にあるティータイムでの談話、そして時々開催される各種委員会での議論などでは、個性豊かな先生がたとお話しできて本当に良かったと思っています。また、多くの分担講師や客員教員のご協力もありがたいものでした。

これからの放送大学におけるテレビ、ラジオ、インターネット、そして教室などにおける教師と学生の出会いが増々充実することを期待し、事務の方々の絶え間ないご尽力に感謝し、放送大学のさらなる発展を願っています。

福岡学習センター移転のお知らせ

学習センター支援室

福岡学習センターは、2014(平成26)年4月から九州大学筑紫キャンパス(春日市)に移転します。アカデミックな構内で、より学習に集中できるよう整備を進めています。

移転先

福岡県春日市春日公園6−1
九州大学筑紫キャンパス　総合理工学府・総合理工学研究院E棟4・5階

交通アクセス

①JR大野城駅(西口)から徒歩約7分
②西鉄大牟田線白木原駅から徒歩約25分

夏季集中科目の学生募集が始まります

広報課

夏季集中放送授業期間に「学校図書館司書教諭資格取得に資する科目」、「看護師資格取得に資する科目」を開設します。学生募集等の日程は下記のとおりです。

	学校図書館司書教諭資格取得に資する科目	看護師資格取得に資する科目
学生募集要項配布	2014年4月1日(火)〜	2014年4月1日(火)〜
出願受付期間	2014年5月1日(木)〜6月7日(土)	2014年5月1日(木)〜5月31日(土)
放送授業期間	2014年7月22日(火)〜8月5日(火)	2014年7月22日(火)〜8月5日(火)
通信指導提出期限	2014年8月15日(金)	2014年8月15日(金)
単位認定試験	2014年10月17日(金) (単位認定試験レポート提出期限)	2014年9月26日(金) 2014年9月27日(土) いずれか1日を選択

夏季集中科目の受講を希望する方は、大学本部広報課又は最寄りの学習センターまでご連絡ください。この要項はご連絡いただいた方のみに配布します。
在学生が履修を希望される場合にも科目登録申請要項(夏季集中型専用)を入手して、必要な手続きをお願いします。

2014(平成26)年度大学院 文化科学研究科(修士全科生)入学者選考結果

教務課

修士の学位取得を目指す大学院修士全科生に422人が合格しました。

プログラム名	生活健康科学	人間発達科学	臨床心理学	社会経営科学	人文学	情報学	自然環境科学	計
募集人員	90人程度	60人程度	30人程度	100人程度	90人程度	70人程度	60人程度	500人
出願者数	140人	117人	479人	114人	97人	53人	51人	1,051人
合格者数	80人	51人	31人	93人	75人	47人	45人	422人
倍率	1.8倍	2.3倍	15.5倍	1.2倍	1.3倍	1.1倍	1.1倍	2.5倍

※倍率は出願者数／合格者数

編集後記

本号は、ノーベル化学賞を受賞された根岸英一先生をお招きしての座談会、地域貢献プロジェクトの報告などを取り上げました。地域貢献プロジェクトは放送大学ならではの興味深い企画で、編集作業をしながら読み入ってしまいました。

さて、あと数日で単位認定試験が始まります。本号が皆様の元に届く頃には成績も出ていることでしょう。私も単位認定試験の過去問を解いてみることがあります。専門分野から少し離れると、とても合格できそうにない科目ばかりで、自分の視野の狭さに気づかされます。多くの学問分野の中から学ぶ科目を自由に選べることも放送大学の大きな特徴です。なじみのない分野、興味のない分野にも是非目を向けてみてください。(森本 容介)

ご意見やご感想をお聞かせください。メールアドレス editor@ouj.ac.jp

放送大学通信 オン・エア 編集委員(2013年度)

委員長	教授	島内 裕子
副委員長	教授	髙木 保興
委員	副学長	吉田 光男
	教授	宮本 みち子
	教授	青山 昌文
	教授	米谷 民明
	准教授	岡崎 友典
	准教授	森本 容介
編集事務担当		総務部広報課

放送大学
http://www.ouj.ac.jp/　ISSN 1343-3369